

二、

「集会」には多くの欠陥があった。全体の動きとしては、いままでのタブローよりは、個人的にならざるを得ない行動によって面白かったが、伝達としての固定化には失敗した、というより関心がゆきとどかなかった。それは音楽的に流れすぎたのかもしれない。音楽には前衛、後衛であれ基準的なものがある。絵を見て演奏するなど、媒介物がある。媒介物がある以上、それは何回も演奏出来るということだ。とにかく演奏の強味はしみじみと感じた。それに反し、絵画には演奏がないのだ。行動にしても媒介物がないというより、あつてはナラナイのが絵画だろう。即ち音楽には音にせよ、無音にせよ、なんらかの意味で楽譜があるということだ。その点絵画は、演奏より、楽譜に似ている。少なくとも現象的には……。その辺の問題は、判らないが、当日の行動と持参した作品との距離は縮めるべきだった。その点、イトイ氏の作品と行動は理想に近かったが、哲学を求めていたにもかかわらず、なんだか、手品、易者に似たのは、計算違いではないかと思う。所詮絵が楽譜となって、観衆を演奏者に仕立て上げるのは永遠の理想なのかも知れない。しかし、われわれは零からの出発であり、零の発見でなければならない二律背反なのだ。

A、このような欠点を如何なる方法で、实际的、具体的行動として補うべきか。行動と携帯作品との二つに区切って考えてみよう。

B、行動は音楽、楽譜に対する演奏、能、バレエなどと結合するその初歩的動機ないしは出発点は、動く絵画であつて、拡大された可能的分野では映画の世界まで浸蝕するのではないか。との関係は、すでに「大集会」の前はビジョンとして述べたものと全く同質のものだ。それ故、九州派の場合、これは明らかに室の提出の概念をとまなうことは当然だろう。だからこの地点を強調するならば、音楽の演奏者（一般に音楽家と呼ばれている）能の演技者、あるいは舞踊者が告示（楽譜、台本、旋律にしたがつて）どおりに演奏、行動し、それに酔うように、我々は作品を告示して、観客を演奏者に仕立て上げ、行動させ、酔わせなければならない。絵画の場合、制作という労働、即ち楽譜づくりより肉体的、労働的であるが故に演奏者の動作に似ている。だから、一步間違うと安易だし、自分自身の独断におちいり、ナルシス化する。それ故、あくまで観客にやらすべきだ。その

時教祖となり、伝達の機能が誕生するのだ。

C、どんな場合でも、問題を抜きにすれば、制作する場合、行動が伴う。その行動が即ち、哲学となり、楽譜となり、脚本となり多数のスタッフの映画撮影となるなら簡単だが、そう問題は容易ではない。しかし我々が、いつきよに大人にはなれぬよう過渡的という「ツマラヌ事実」は、いつも身辺につきまとい離れない。それが我々の運動を失敗もさせ、成功もさせる。即ち巨視的にみれば現象だけが目につき、全体の結果を忘れて 前衛という名の猿

芝居的売名行為の利益追求すらやりかねない。利益のないのが判っていて、それが目的と開きなおる。目的意識があれば立派だが、利益のないのに、あるように錯覚して、目先の利害で利己的に出るのだからやりきれない。だからといって、それらを恐れていたら、なにも出来はしない。それを食うだけの神経の太さが要求される。このような見地から、それらの作品、行動に誤算、ないしは錯覚を起こさせないだけの過渡的配慮が必要なのだが、「大集会』では、その辺が欠けた結果、思想の固定化に失敗し、当然、思想の具現物である携帯作品は出来が悪かった。

D、この携帯作品を思想の具現物として開拓することこそが我々九州派に課された重要な課題だ。一部グループ員の間では、すでに議論されていることだが、携帯作品の動き、思想を織り込むことの必然性。そして、もう一度、逆な立場から自己規定を設定し、作品との交流を徹底的に検討すること。この時、はじめて飛躍できるのではないかと思う。制作にあたっては、それを本の形式折りたたみ式、布、ゴムの本など、自分自身のビジョンに従って問題を解決してゆくべきだろう。

以上の諸点をいくらかでも解決し、地点を確立することを前提として、つぎのことを提案する。

〔一九六四年度の"英雄たちの大集会"をニューヨークで行う〕(携帯作品を持って命令する芸術でゆこう)=場所を変更するときがあるが日本以外の土地である=

ニューヨークといっても、九州で行なうも、パリで行なうも、生理的現象には、いささかも変りはない。だが厄介な歴史的事実がオレ達の誇りを傷つける。日本文化はなんと横文字が君主づらして横行していることか。封建の時代ならいざ知らず、現代の日本もまたそうである。悪いことには、オレ達、自身が、その横文字の中から生まれ、生成しているのだ。されば背を向けることは許されない。その中から起き上がり闘うこと、そのみしか我々には許されていないのだ。それは万葉集よりギリシャ神話を身近に感じ、ギリシャ 国民よりは程遠くしか感じていないというオレ達。日本の若者の悲劇との悲劇を避けることなく、そっくり、いただいて、あるいは、ぬぎ捨てて、悲劇の王国にたつとき、本場の横文字とパンチを競うべきではなかろうか。そのためにこそ、悲しくも、なつかしい九州を遠く離れてみる必要があるのだ。それはちょうどビールは日本内地でも飲める。だが君よ、九州で飲む、そのホップの味が、ドイツのそれより一例え、本場の味以上であっても、本場で一度は味わってみる必要がある。日本で本場以上のホップを味わえば、味わうほど、それは裏町で奏でられるアクロバットの悲しい旋律がにじんでくるのはいたしかたがない。なぜなら、子供が成長すればする程生んでくれた母親の姿を眼に浮かべるからだ。死んでいない。ドイツが、まだそこにあるのなら遊覧旅行でも結構その折りに会ってみる必要はあるのだ。みにく

い母親の深い皺であっても。

A.、わが九州派はどこにも負けない、それは、いわずもがなのことであり、また、何処に負けても、いっこうにかまわないことなのだが、そういう意味あいから地方性というものは、いささかも、意識しないにもかかわらず、別な関係ない人から、いいがかり的に地方 ということのを思い知らされて来た。別のことばでいえば、日本では東京が本場なのだ。そして本場の味を誇示された。そういう意味では 「このたびの英雄たちの大集会」ですら例外ではなかった。開催直前に東京で、本場から来たジョン・ケージの演奏があった。当然、その嵐は吹きまくったといった方が正直でいいだろう。そして、同じ音楽家なら、同時代に生きるという意味からも避けるのではなく、自ら進んで真似る必要(いい意味で)があると思う。そういう意味からは大いに成果があった。しかし絵画の面に同調すべき餘地があったのであろうか。なににも私は島国根情でいうつもりは毛頭ないのだが、あまりにも似た悲劇であったことは確かだ。それに似たことはいくらかあった。アン展、それに出品拒否など。その間の事情を簡単に説明することはむずかしいことが、遠距離崇拜、まだ見ぬ母親への憧れなど色々あろう。そして、とりもなおさず、無意識の世界の中にまでしみ込んでいる実情、そういう我々のコンプレックスの生ずる餘地を徹底的にツプスこと、そのことこそが、この企画の最大のネライであり、その地点からの発展こそが、現代絵画の厚い壁を破る。もっともよい方法なのだ。

B.、この場合、もっとも大事なことはニューヨークを指定する主体性の問題だ。すでに何回も述べたようにタブローは趣味の範囲においてしか存在しないし、即ち、画家は生活出来ない。それに、一点のタブローで、趣味者たるブルジョアが、どれほどの感激を变革 されたかは甚だ疑問であると同時に、作家がそれでいいのか、悪いのかという問題は永遠の課題というより、避けられているに過ぎない。その場合、指定すれば、どうなるか。指定とは他人に向かって命令することだ。命令するからには、命令者でなければならない。この命令という言葉にしても、誤解を生む恐れがある。しかし、私はこういうふうを考える。大集会で「明日」という言葉が安易なところで大いに誤解されたが、なにはともあれ我々が使用した「明日」という言葉は、実際に「英雄たちの大集会」を開催したことの事実によって限定され、九州派的な意味づけが行なわれたわけなのだ。 そんな意味から肯定するなり否定するなり、勝手に悩むのも結構だが、それが行為とは、いささかも関係ないくせ、逆に「明日」という誤解の多い言葉にもかかわらず、それは汽車の時間表みたいに、認めると認めないにかかわらず走るとすれば、行為が、それを支点としてダイヤが動いたという事実にも似て、不本意ながらも「明日」というダイヤの上を走らねばならない。ここでも、「命令」という言葉が必要なのだ。

そして『命令』という言葉の定義づけには、あるいは内容証明には、九州派が歩きたいまま

での歴史を賭けるのは、また当然だろう。

以上、当日、みんなで討論しよう。